

「なごみの極致を聴く」馬場啓一

美しい音色で絶大な支持を受けている名手エディ・ヒギンズとそのトリオに、これも澄んだトーンに力強さと優しさを兼ね備えたテナー・サクスの達人スコット・ハミルトンが参加した、なごみの極致とも言うべき好アルバムである。

ジャズにおけるなごみとは決してイージーな活動から生み出されるものではなく、優れた技を持つ人たちの思いと、周到に計算された企画に支えられて、初めて可能になる。いい加減などころからは派生しないのだ。優雅に水面を進む白鳥が、その水面下では人知れず巧みな動きによって水をかいているのに、これは似ていようか。名盤と呼ばれる作品には全てこのなごみと、それを裏打ちする技術が存在することを知る。

あまりにスムーズに、端正な音をつむぎ出しているため、エディ・ヒギンズはそのたくいまれなる技術と音楽性を取り沙汰されることが少ない。だが、同じ曲をその辺のピアニストが弾くのとエディが料理するのとは、ひじょうに大きな違いがあることを、我々はもっと認識すべきだろう。

これ見よがしにテクニクをひけらかすミュージシャンの多い中、彼のこういう作法は地味に映る。だがじっくり聴き進むうちに、その端倪すべからざる内容の濃さと、芸術性の高さに気づくのだ。エディ・ヒギンズの作品が、結果として篤い支持に支えられているのは、畢竟この事実を日本のジャズファンがしかと把握しているからに他ならない。皆さんよくわかっているのだ。

日本でのアルバム作りをスタートさせ、10年を越えたエディ・ヒギンズ。作品の数も10枚を越す。そこにはひとつの駄作もなく、手抜きの仕事もない。全てが彼の人柄そのままの、熱い思いと、真っ当なジャズに対する愛情開陳の成果である。付け加えるならば、インテリの白人ならではのユーモア感覚。これらによってエディのCDは、人々のプレーヤーに乗る頻度の高いものになっている。

誰も好んで汗臭い演奏を聴きたいとは思わない。いい気分になりたくて、高いジャズの香りをかぎたくて、アルバムを買うのだ。そういう欲求と人々の嗜好にまことに見事にフィットしたピアニスト、それがエレガントそのもののエディ・ヒギンズなのだ。そこにあるのは高度のテクニクと、充実したキャリアに支えられた好ましいキャラクターであり、澄んだ音色で提示される高級な解釈である。スタンダードの演奏において今日エディ・ヒギンズほど優れた内容のピアノを聴かせてくれる人物はいないと言ってい。こういうミュージシャンを身近に持ち、程のよいペースで送り出される新たな録音に接する事の出来る我々はまことに幸運である。当のエディも、良きファンを得て喜んでいるはずだ。

客演のスコット・ハミルトンも同様で、30年前に華々しいデビューを飾って以来、その人気と実績を裏付けるものにしてきたのは、彼のテナーに備わった見事なジャズ・スピリッツと最大級のテクニクの冴えであった。これも、派手なブローウィングでげげぱく飾り立てたりしないから、落ち着いた印象と静かなキャラクターとして、地味に評価されがちだが、実質はひじょうに熱いものを秘めた、切れれば血の出るような内容なのだ。それがあるから、ナンバー・ワン・テナー・マンとしてトップの座を維持して来れたのである。若手の、という冠詞は取れたものの、そのエネルギーでみずみずしい演奏作法は、他の追隨を許さない。

これは、そういう2人が見事に作り上げたピアノ・トリオ・プラス・テナーのフォーマットによる、こよなく美しいなごみのジャズ・アルバムなのである。

「あなたの家に帰りたい」

コール・ポーター。うたにはそれに相応しいテンポがある。ヘレン・メリルとクリフォード・ブラウンが有名にした曲を、スコットとエデ

My Funny Valentine マイ・ファニー・バレンタイン Eddie Higgins Quartet featuring Scott Hamilton エディ・ヒギンズ&スコット・ハミルトン

- あなたの家に帰りたい** You'd Be So Nice To Come Home To 〈C. Portet〉(6:57)
- アイム・ア・フール・トゥ・ウォント・ユー** I'm A Fool To Want You 〈Sinatra, Herron, Wolf〉(3:51)
- サニーがブルーになるとき** When Sunny Gets Blue 〈M. Fisher〉(4:50)
- アローン・トゲザー** Alone Together 〈A. Schwartz〉(7:03)
- マイ・ファニー・バレンタイン** My Funny Valentine 〈R. Rodgers〉(3:34)
- イツ・オールライト・ウィズ・ミー** It's All Right With Me 〈C. Portet〉(7:48)
- スターダスト** Stardust 〈H. Carmichael〉(7:06)
- 瞳は君ゆえに** I Only Have Eyes For You 〈H. Warren〉(6:40)
- ドント・エクスプレイン** Don't Explain 〈B. Holiday〉(6:56)
- 中国行きのスローボート** Slow Boat To China 〈F. Loesser〉(7:08)
- イマジネーション** Imagination 〈J. Van Heusen〉(5:19)

エディ・ヒギンズ Eddie Higgins (piano)
スコット・ハミルトン Scott Hamilton (tenor sax)
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart (bass)
ジョー・アシオーネ Joe Ascione (drums)
録音：2004年9月11、12日
アヴァター・スタジオ, ニューヨーク

© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊
Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan. Recorded by David Darlington at Avatar Studio in New York onSeptember 11 and 12, 2004. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Front Cover Photo：© Irina Ionesco / G. I. P.Tokyo. Artist photos by John Abbott. Designed by Taz.

ィはこれ以上ないというペースで運ぶ。スコットがワン・コーラス吹いた後の、シングルトーンで奏でられるエディのピアノが素晴らしい。ノルウェイの作曲家グリークの書いた「パール・ギュント」の「アントラの踊り」の1節がご愛嬌。続くジェイ・レオンハートのベース・ソロも聴きもの。ドラムスのジョー・アシオーネのブラッシングもきれい。

「アイム・ア・フール・トゥ・ウォント・ユー」

フランク・シナトラが書いた陰隠滅滅としたバラード。だがスコット・ハミルトンとエディ・ヒギンズにかかると、リラックスして、そう深刻になるなよと諭しているように聴こえる。さっぱりとアクの抜けた演奏。このアルバムを貫くのはそういう大人の余裕である。だから安心して身を任せられる。

「サニーがブルーになるとき」

シーガルとフィッシャーのやるせないスタンダード。それでも、バラバラバラピヤという一種ノ天気な歌詞が、決して深刻な内容ではないことを教えてくれる。当然エディとスコットも、悠々として迫らざるタッチ。

「アローン・トゲザー」

アーサー・シュワルツとハワード・ディーツ。全員できっかけをやって、スコットによるテーマがストレートにスタートする。アンサンブルがとてもよく、ミュージシャン全員が大いに息のあったところを聴かせる。セカンド・コーラスに入っのスコットのタッチが素敵で、この曲がジャズメンに愛されるのは、このような料理がひじょうにやすく、効果をあげることを知っているからだろう。スタンダードとは畢竟このようなメソッドが限らない可能性を持っている世界に他ならない。エディのピアノもジェイのベースも、いかにも勝手知ったるという感じ。実に安定しており、安楽の極致である。

「マイ・ファニー・バレンタイン」

ロジャース＝ハート。近年バースから演奏されることが多くなった傑作。だがここでエディは深入りせず、スコットのテナーがあっさりテーマに突入する。幾百というカバーがある超有名な曲。どう吹いても、誰かのに似てしまう。これでミュージシャンも結構大変である。だから、というわけでもないだろうがスコットはごく真っ当に吹き、結果としてそれが良い内容に結実した。切なさを排した、どこかユーモアを感じさせるのは、2人の風格によるものだろう。セコくないのだ。

「イツ・オール・ライト・ウィズ・ミー」

再びコール・ポーター。スコットはこのくらのテンポが一番良いようである。手馴れた調子のエディのピアノも、ポーターの持つ気品や粹さを見事に表現している。サビに聴けるエディのスイング感も絶好調。テナーのソノリティすなわち音色と味わいが素晴らしく、極上のワインのようなコクと切れを感じさせてくれる。

「スターダスト」

ホギー・カーマイケルとミッシェル・バリッシュ。全米で最も好まれた曲というアンケート結果が示すように、恥ずかしくなるくらい有名な曲。スコットは真面目にバースから演奏している。端正な解釈で、この曲の持つ白人ならではのモダニズムを開陳、ひじょうに聴き応えがある。ぶ厚いテナー・サウンドにスコットの真骨頂を聴く。

「瞳は君ゆえに」

瞳は君ゆえに、と訳されるハリー・ウォーレンとアル・デュービンの作品。これもスコットのキャラクターに合ったテンポで展開し、気楽なくつろぎを醸成している。ジェイのベース・ソロは、スコットとエディの男性的なタッチに対して女性シンガーのそのような可憐さを感じさせ、その対比が好ましい。といて決して軟弱ではなく、腰の強さを持った見事なタッチである。それがあるからエディと長くやって来れたのだろう。

「ドント・エクスプレイン」

ビリー・ホリデイ。彼女の十八番だった。歌手が自然派生的に書いた曲。だからインストでは結構むつかしい。特に出だしに気を使う。しかし達人であるスコットはそれを丹念に解きほぐし、立派な解釈を施している。いいねえ、スコット。そういう感じでエディが受け、見事なフェイクでワン・コーラス演奏する。時折挑発するように挟まるジェイのベースも、さりげないジョーのドラムスも上等。スコットにターンしてエンディングに持ち込むあたりの作法はまさにベテランの味。

「中国行きのスローボート」

フランク・レッサー。ここでは中間派と呼ばれる作法を意識した、掛け合いの楽しさとくつろぎの表現が聴ける。長い時間をかけて君を口説こうというお気楽な内容だから、難しいことはナシ。エディもスコットもそう言っているようだ。テンポの良さを得てスコットがずこぶる快調。それなら俺もと、ジェイのベースも畳み込むようなタッチで迫る。

「イマジネーション」

バーク＝バン・ヒューゼン。ポーターやロジャース＝ハートよりもモダンなタッチのジミー・バン・ヒューゼンはエディとスコットに似つかわしい。ジョニー・バークとサミー・カーンの2人の作詞家と組んだ実績を持つバン・ヒューゼンだが、バークの場合に、モダンさをより強く感じる。この曲はその好例である。朝々と、しかしデリケートにスコットが吹くテーマは、この曲のプリティな魅力を余すところなく抽出している。エディのしみじみとしたピアノ・ソロも秀逸。ラストを締めくくるに相応しい仕上がりである。